

## 第 10 回(2021 年度)若手研究者研究助成 成果報告書

山下智弘

研究課題を「分析的ドイツ観念論における論理学の位置付けについて」と題して研究を行った。

本研究が「分析的ドイツ観念論」と便宜的に呼ぶのは、ピッツバーグ・シカゴ・ライプツィヒを中心に活動し、アリストテレス・カント・ヘーゲル・ヴィトゲンシュタイン等の影響を受けている哲学者である。本研究では、論理学の捉え方を軸として、これらの哲学者の思想の共通点と差異を明らかにすることを目指した。

本研究の成果として、私は McDowell による知覚の選言説を論理的な真理について論じたものと解釈することで、既存の批判に対して応答するとともに、分析的ドイツ観念論における批判を参考にしつつその限界を明らかにし、より徹底した立場を提示するという方針で論文「知覚についての選言説を擁護する」を『科学哲学』に投稿した(54号2巻、71-91ページに掲載)。

同論文の主題である知覚の選言説は、知覚は対応する判断が真であることを保証し、かつ知覚の主体は自分が知覚していることを、その知覚そのものを通じて知りうるという主張である。同論文ではまず知覚の選言説が、知覚の性質についての実質的な主張ではなく、知覚に基づいた判断が理性的なものであることの条件を明らかにすることを目指したものであることを示した。このことから、知覚の選言説はそれに反

対することが無意味なことを述べることになるような主張であり、その意味で論理的な主張であることが示された。

次に、McDowell が知覚の選言説において知覚についての主張として提示したものを、知識一般について当てはまる主張として、より一般的な仕方で論証した。すなわち、知識の主体は自分がその知識を持っているということを、その知識そのものを通じて知っているということを示した。これは、判断が原則的に知識であるということを示すことを通じて論証されるが、その論証のポイントは、これらの主張を否定するならば判断の観念そのものが理解不可能になるということである。それゆえ、知識一般についてのこの主張もまた、論理的なものとなっている。

最後に、知識についての主張へと一般化された選言説が、McDowell の持つ別の主張、つまり最小限の経験論と相容れないことを示すことで、McDowell による知覚の選言説の限界を示すとともに、それをより適切な表現へと置き換えた。すなわち、McDowell においては知覚は概念的能力の作用を含む作用ではあるものの判断とは別のものと考えられているのに対し、私は、知覚が独立した認識作用ではなく、判断のひとつの契機にすぎないと論じた。これは、Stephen Engstrom や Andrea Kern による McDowell に対する批判を参考にしつつ、具体化したものである。

同論文の成果は、分析的ドイツ観念論の近年の発展を、知覚の選言説という主題の中で再現したものとなっている。すなわち、McDowell の知覚論から近年の議論への

移行が、McDowell における経験論の残滓を排除し、よりカント的・ヘーゲル的な考  
えへと移行することであると共に、McDowell のうちに隠伏的にのみ見られる論理学  
的な動機づけを貫徹するものであることを示している。